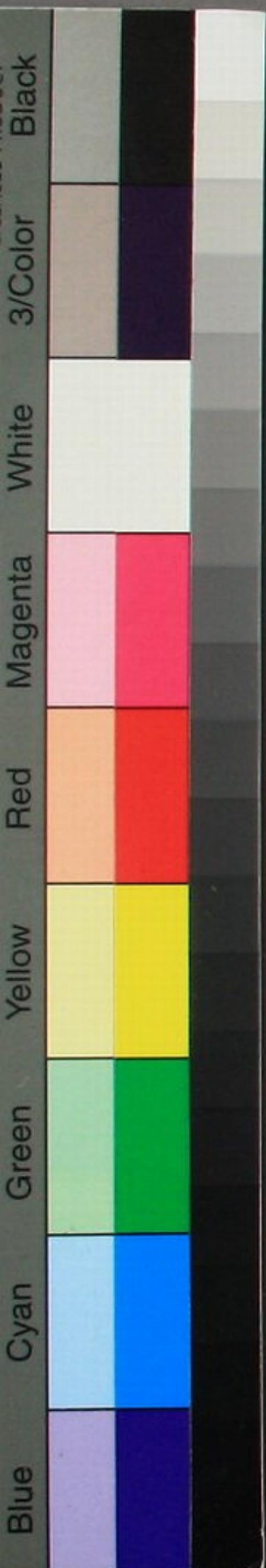
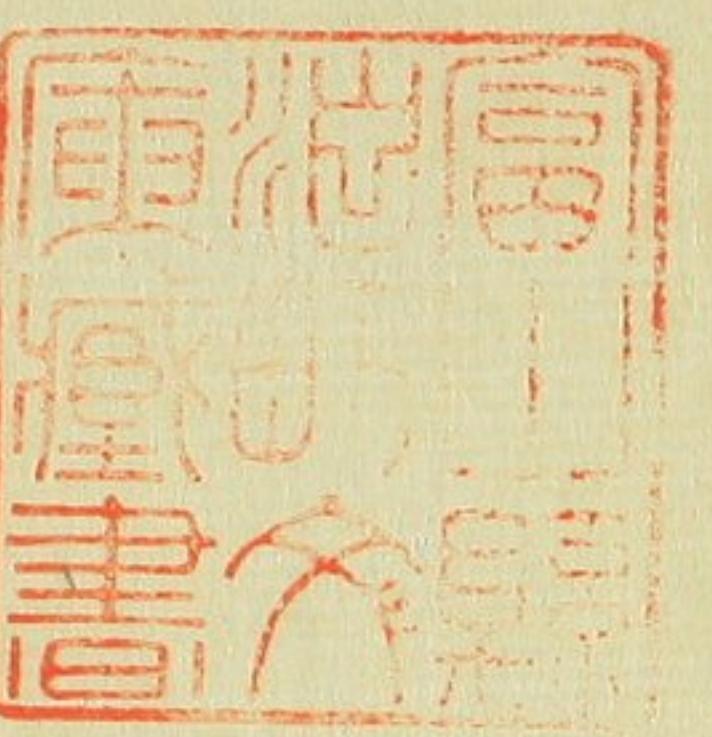


5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6

首書
孫氏書譜
卷之二



清十
元



河東十八卷名董物合之後弁狀將取柏子哥梅枝

清十八卷名畫於人之行于少卿原於吾林林
先生又同高參所和之曰崔馬子之文亦其文也

○れもさのす 河 明石中宮十二歳 うちの物語云藤
原君のじどあめて宮十二歳をさうよ裳をみ
よアズヘテ
○春宮をおゆ 河 冷泉院春宮時應和三年二月
廿八日申元服 下略 花 春宮ハ朱雀院の皇子今事
十三歳也申元服ハ余月のかとく下よア是又冷泉
院の二月也例と摸セア 或拟春宮卒年のす明石卷
源氏廿七歳の時ニ歳よりひ由リテ 今ア年ハ十四歳也
○やそいも 春宮を亞古れへ内の方ニ

。じ月の晦日 巴秋 節會とも云ひて隙あり時分也
。太武のまわり 事大貳一任五ヶ年也と云ふ、頃磨巻よ
づる太武よハ不可有又其時太武のまわりと云義も有
りとひそひのよハ 細新渡の香具ともも也

あらわのとおがよしむかわ
てよひのゆきすまくまくは
方よせりうごのとくわく
やうれんまの町へ、
肩のへりゆれんおわゆと
うゆやあわくわくひよ。
この食事。おのれの香
どもかくさむ。おのれの
よしゆくわくとおとせ
おのれのゆくわくとおとせ
どもかくさむ。おのれの

のちとくれども、或様、内座取の餽也。

物のわい 河物覆敷物背

孟衍の箱の覆と唐
の水をもよ

故院のひよりの河高麗へ光源
綾緋金錦 金と織付たり錦也全

延喜八年大使裴璆色の物と歎する。記
ムアノトヲ

10

此ひ花故院の後又高麗人の朱朝せう
可有や此度のわざとよりては二条院乃
ゆくとよめられつきてよへくよもうちみる
細大式の奉き新渡の物とも也

○二種の味 盆二種の味 調合
細かくこまかくこじらせて、董物と合せます。

或抄 花散里明石上前秋院ホセ下よアトトナニ
種アハ里方侍從也
。とくもの或抄 内裳着山入内の時又入山用意
。内着もとくも 細山元服山裳着のゆ也
或抄紫上の方がヒヨリと外して山とくのゆ也

○
かくの音 河 鐵曰 香細搗者和供入鐵門
搗五百杵ヲ、芳山太平觀記

。えりこゝれ花えりことえりと展轉書写
の誤可有と河海よひう誠よ可然也この字と玉簾
字よアリテヨリの字よウシテ其後又エリトウル
タマラタマスナリトウルトウルタマラハ此物語
タマラとウルトウルタマラ兼の字とえりとあら
タマラ又無疑故タマラコトハタマラシト可心得也
承和ハ仁明天皇の年号也ニのカタミスハ墨方
と侍從之ニ也

ひづれの耳よ 弄不傳男子へ云制めハ也
おもひ生 細花鳥の委取詮ハ兩方よ小寢殿有

卷一

あきのわざをあつて。ひや
あはまきとて。ちかむまう
ひのわをかし。くわゆま
あとのア。もよおを院の巻が
ほくじ。とく。のまわり
あやひくわをかど。今を
のねよじとあむくわ。
いあてへせんとおてのを
おさす。おひくわのくわ
とくあくわせおて。ひく
くわくわせおて。くわ
乃あやうすとのあ。ノギ
おさす。おひくわのくわ
とくあくわせおて。ひく
くわくわせおて。くわ
のをとがく。皮。くわ
あ。おとはまん。よとあれ
のをとがく。皮。くわ
あ。おとはまん。よとあれ
乃あやのわ。とく。でく
もとく。とく。ひき。くわ
あ。せた。くわ。ひき。のき。乃
あ。せた。くわ。ひき。のき。
壁上也
一辰と也

母屋の中とよりよして内帳とてうる物也母屋の
中といへり外様ひとと放生とハ云也晴の方也
ハ余式アラ花八条式アラ本康親王ハ仁明天皇が五
の皇子母、從四位上滋野溫子柔議貞主女也源氏君
れあくセひ方と此上の方とも侍従里方セアレレ
承和のれいちめ方うれハクスル人きやうあくアラす
但アラアリハ同ノ後より其人の意巧よ
マテ加減もする有ようて次オソクアリム有物也
八条式アラ宮ハ此上の父式アラえりとアリ又兩
種方ハ不傳男と義和門のゆきくらの方よのせ
され、紫上のと正説ふと云也是よりて源氏君の
あくセひとハアヒとのアリてひそみ其よゆく
ねのハのせアラ也
。やまくよアラぬ人孟董物と松ヤクシヤトヨ多
人ハトウキニセ也

うくこの箱弄このまゝうてよし
細の厨子のとゞ物也 孟香疊筥うも結構
の辯也花鳥よゑ
やうへを孟ウノトキモハドセ

細いのと
つるぎ也

○矢々のるや 細 金の宮也
○わづきさろ 細 裳著也

○ひくとく 益ほ氏の山兄弟中別而無未固也

○さゆのすみす 万水 布氏と矢々宮と談合一せ

○前院 細 朝貞也

○高光日記云ひの山より往けまつて
人のて物として仰まればちうまよサ神に

乃ちうそほへぬよ。まつしゆ
のとくれどもとくらむて。
まことかとくらむ三月の古
あらわすておまくちゆかへ翁
さうよ。おひもまくわるがと
よきやのえじりて。いき
のくあふがまくらて。いき
ひきゆきむづきよきやのえ
はくあれじてかくのとくの
あくまくあくまくをせん。を
めぐらめぐらがくあくまく
まくまくまくまくまくまく

かくのをひそめし。父家は
この西にあつてゐるが、
ゆゑせばやど。ひし。
ほく紫上也 同方と調食者也
ひのうちをあきらめむとぞ
ゆくあり。べと。おとこののれ
きあひゆあらひゆう。うるわ
おまのよみがえり。あまのあくび
てうどんも。うるわのうるわ
どものやう。うやのとう。ひのの
うもくてもあられぬ。ゆよよ
くくやう。きせきへよ。ゆうく

卷之二

春よりて散るよもぎの梅花よりはなまくら
宮をうめゆともも 細ほ氏のひきぬき也
いとうせきよみ 益兵の宮の羽也
巴秋 わきよもぎとくさり也
わえよそ 細ほ氏也
いとうれく 益官ほ氏の返答也
さへ焼物と前次院へあつておひのゆ也

アラのつこ 益 沈箱 瑞瓈 叠董物入也
巴秋 茶つゝきと云う

心葉 花西宮桜 菊花宴の膳具心葉藤花用
組テ 今案心葉のたゞ一枝もサ枝のやうな金子そ
えりてゐる也 細箱の中より枝のやうを作て糸
ひきとねらひ也里方ハ霜雪下にどうされぬ匂ひよと
へ緑ハ黑色よりうすやくねはけするゝ心あり
河花季 白留萼より白梅とと也

○えんきりぬ
細兵乃富羽

○花の香へす 齋院也 細葉あそびをす物、匂ひもす
されど、うつむく人の袖、すきやく我おと卑下しゆす
也。アラク、うつむくねよのうづかせ也。

○宮ハシドリ 盂兵石せうと一段吟しづ
の宰相中將孟夕霧のさいわんのひ使と也

。紅梅の花 紅梅の唐の物の細長也河海
香細長とあつ誤也女めの裝束よもうさみひづ
まひあゆとせ

○の色の紙と花紅緋の色とその色の
紙といふも

○宮うのゆめ孟何うるすは有文さんハ秋う
ノホクく矣くえの初也うらのとハ書中上

○花の枝よりほは民也 河梅花もうちうはう有し
よりへれとうじう香ふそしやく 梅花うどんを
うう春風よ心とうちハ人やよりあ
細人のうちんことハ作わともせざりの匂いハ
えうひうきとせううちよ物トヨシキモセシ
ゆくつアタケテモセ
○やめうん細官のゆううれ程よくうと
よくそめうけきみひとトぬ也 益草子也
○もやよハ細浦氏の約うくと合ふとちくへ
やうとくとくとやうすれと明石姫君ハ浦氏の
みうねうくとくとくと

○いとアラシく 美れゝ 河 醜 ミニタレ
○うそそゝハ 河 外人不見て應笑。白氏文集
細ほほの卑下の羽也。此朋石姫君うちしてアラシくき
き他人ハモロクもて腰結のモテ秋好へドモ也
○もろく。この細秋好中宮のモテ也

。あくちのと花あやうり物也。齋宮安ゆきとよ中宮
まことうりぬくはあやうりゆとゆひぬく也

○モクリヤ族取扱むそあうとの所也

此又の河董はちうつゝもひまくら物也と云
仍而或水邊よ埋る或花木下の土よ埋ひ故也
○ゑくわくわくわくわくわくわくわくわく
万水ひくくすす董と參まつ

○されどせひく細ほ民の釣具物の際、ひかと一
○されゆうやくさん河君よりて誰よりやくさん梅花色を
とうとも知へまし

ヨモギノモ 可能のあじわせ 異ト

いひちくゐ孟 そハトハを一やうもアラ也 墓
の兵アリ宮とテのひ也 一々きあくらヒ、一々きあく
てハトホ氏の刃也 此詞難心得宮の心中とは氏の争
と争て兩家用之宮の心よハモアスミシレトモ
ソヒタネトモ一々キハヨモイハドモアスミシレトモ
め也 又ホ氏のひよハ宮の卑下モシタハヨモアスミ
キハソトモシカモシハカムトモアスミシレトモ
キモアスミシカモシ也

○みのそうニシテの孟 ほ氏の合ひよと今トモアスミ也
彼不傳男と前みわフ 或掛里方侍従の二種也
○右近のちん乃 河承和時右近陣の内溝北邊の地
ミテモアス近代相傳にて其名をアスルと云々上下略
花略而筋書之 董物とうじアスルアスル
梅花、梅のや菊花ハ菊のやスラウジをアスル
セアリ黑方ハねの下アラトシ 花又委
河海董物と埋ひ日もアリ春秋七日夏五日冬十日

○惟光の宰相 弃 惟光宰相又仕るる爰又かて乃而
○兵情のせす 細し女よ童そあつゝもの也
○宰相に將 孟々努也

○もくらすと孟兵馬官の辻キテアハ董物の燐
ひせひねス也
○おう一方トモハ袖尺丈とハ同方キテモ各別
ヌズミナリシテモアラムヲミセセキ也

のうきあを巴歎俗ようことえひ也批判也

いとまうめく或様一真あつやむりうき心也

細ほ民も皆上も黒方とあらずみくこと
是ハいつとよりもうやうるをものありてそれうと
黒方のうへやうよ有(さる)まく。重物の家(ふみ)え
巴(は)枝一(い)え花(はな)のうへらうう一(い)枝(え)と題(し)ま
すれども

やくのれハ孟
れ薰物トシテ略
細佳從ハクク合せ
キと其中モホ氏のモ
キテ也

三月をやうすよ 弄 紫上一種如て合せぬ春のや
ふとくべて 梅花ともそわづらと 花委
いやらぬうひ花 寛教院邦り祝ひまくせて春を
きハ丁子ともさわづらやるを心もひどく

このよみを 細梅花うれハ也

夏の四方 菓子花散里へよもぎとあくす
ひのきそべりて荷葉一種あくさみ也 夏の薫物也

○まくらとまくら 目此約むかひう

孟今の時節よわざひと云ひ也

冬の山方 細
明石上也

。とくとくよよわう 細梅花荷葉菊花落葉うきハ時
スやひけんくもあらせほくことと斟酌わう也
巴極明石上時くよよわううハ落葉うきへこと
さと薰衣香と一名百和合え 河委

さきの朱雀院 花鳥委 弄承平の山門と曰
く。この常ハ宇多帝と前朱雀院と曰く
。公忠朝臣 花鳥委 弄承平比の人也。孝の孫
百歩の方ハ二社ともありと云。承平院

うひえそ 細まゆをうそあひ
てとうひえそ也 花鳥何處別也

孟子曰：「人情有所不能忍者，匹夫見辱，挺身而鬥，此不足為勇也。天下有大勇者，卒然臨之而不驚，無故加之而不怒。此其所挾持甚大，其志甚远也。」

機
械

○うとうとく 細ほ民の約ひつきよもととの
○月よりぬれハ花上の約は二月十日とあり河津
二月初といふ相違せり
○おやアモ、万水とて物ハ批判とてねをよろ也

〇久どより月の孟二月十日比面白時分也

。おぐのやう 河原のやう也

○若人ふ 同 殿上より
細 六条院の殿上也
○あとのねむひ 弄 裳衣着よりあそひ可有心也
○ふととの河 琴の装束とハ絃を柱つをよと
もろよととハ絃の惣名也 篓爭よりうへくも次の
詞より 以琴ともやまとて琵琶うのと和琴と
なり

○頭中將 孟 柏木兄弟也
河見糸 巴拟裳着礼矣也ゆまよそ
不見じゆ今目誰だ越候こし也よ大裏おほ八篇會はん
外記わい奉まつ也

○頭中將 孟柏木也

○宰相中將 孟夕霧也

○物よりあひてうし 河わよりあひてうしとハ春
うれハ双調也

○弁狀將孟色トシノ也韵母トシヌ高砂トシヒトシ

○梅え何呂催馬乐梅えユニシナ寫や春うそとセ
セ二度春うそとセうそトモイミテ雪ハねうけ三辰ゆくを
トシや雪ハナリテ 弁是よりて譽の名とも懶而亨
スより詞よつてうと初ヌテ又心どくに号此四義也

居の處よりの事。因のあわい
よがすね并のぬがどひん
さうすてすうづくをとやまを
おひきおととまのまき
て草むらを走りてひかゆく
かみくわくわくとどなり
おととよの草むらを吹
とくわくじくわくとくわく
柳子すて柳子すて柳子すて
柳子すて柳子すて柳子すて

○やまとかくと 花助音のう也

○あうを 改換 源氏 金宮のとあまうでく也

○鷦乃す 金宮也 花 鷦の色ハ 郡曲のう也

○千世ヒタクテ 河ひつまう野ヨリのあくらん花
ラモハ千世ヒタクテ 弄祝のわよと開行便有
色モクヒカレ金 盆クルモトアムヒツハモ
ヒ音信ウハ満足セトモ也

○頭中峰 或換 源氏の山盆と相本互トシハ
スノホを夕霧ニテアリテ也

○うひのう相本也 河嶽遺花の色ヒアウシ
アラモト鷦のわうれ行ふてうねれモシ
細ハ半崎の宰相ニシモトモ笛竹ヒトモシ也

喜ね津得

○あうてす 夕霧也 細吹ヒトモヒトシトモシ
花セシムヒトモヒトシニシム花ヒタマヤドウヒト
ヒタマヤドウヒトモヒトシトモシ下の
羽ヨウヒトモヒトシトモシ下の
弄笛ウレハ落梅の曲ヒトモヒトシヒトシ吹ヒトモシ
ヒトモシ

○きよきよと 細花のう情うトモシ
○うじひとのねうのねもび
までもと歌ヒセヨハの節行

弁あわ

○あうて風かくうち花のま
とうかがまで雪やうづがみ
あくとまがうづがみひじゆ
ねぐわくもやうびあま
あくとまがみひじゆあうてがみや
うづがみひじゆあうてがみや
のひのくのひのくひじゆ

○わとく物 改換 金宮へのとあまの也
○あうの 泉 源氏のゆりもうれは也
孟 一トアヒニ具也

てねれぬ 未焼也

○車よ 万水 兵乃宮の帰車也

花のうとす。佛也。花此えすと
もうもくす也。弄艷うす。卑下。

○花のうとす 源氏也 花此えすみへ縁うみ也を
もひきるゝ也 弄艶うみ卑下こぐらひ神と云
禪閣一室えすみふへてありみ也 源氏のとくらう紫東
の心あり何とく優うみ心也

花苦ノ也
夫婦よきわふと云ふとひめ也
車クルユ先車スケテ後牛トクル也

とつぶせ也 細ともひもつうりてつうり一筋也
。うそとすほ民也 益せうとほ民の肴て、
人をもつて逍遙院へまよは有まること也

の花もよての色うべぬうのやうは不可心得浮城へ
愁而かうべく也朱買臣錦と着て歸るやう一夜

朱買國
之可然也
孟官一夜

父兄の事よりといひて娘と恐れたりゆ也
うふ花之くらむ心也 或批辛字相叶乞

○やまととくらひの或掛
ごくねんじゆきの也

うてうめかす 丂秋好中宮の坤北殿也

宮のありま
きと四方也

河裳着の時晷

う心也 内侍其役とつゝう也
上も 孟先生上也

かくを孟秋なり

○宮人足利細中官明石姫君と始て不和也

○初之東也。細潔

孟不私是
巴被子上之也

○後より
細中官の行啓と後代の例よ
可成り立つ故よろひゆと也
心せきく或歎世をそぞろうありく心也

○ひきりへを敷被中官の羽也ひそめれども出分
別もあくまよきよ感懃にとてうなづく
蘭心のやううると謝一ぬ羽也

。のあひきつめ秋浦流のゆきはとすと
浦のゆきとひ消へむ

。おやとおよ細ほ民のよまよ繁昌うつと

○おもひ或初中官姫君坐上すの御奉書の
事とうりと申候也

或秋 明石上姫君を貯まつておもふと深の
じよおやりて也

うるるの花よやかと世の常のよせ也今日見る
中くわゆをまひひとれぬううへ大概えうと
ううとと細文アウ筆法也
或承大さのへそう儀文えく多よおもとと

○春宮の御元服 河東宮の元服二月例先勘

きわひまつともと 河競翁
或抄我さうとゆうひぬ也
おりをひとと河思翁とひらうと草木の始て
萌えそへう也

。左のやまと河梅枝の左大臣不^レ玉圓是ハ麗景殿の
昔れ父とぞう同人乞別乞可る簡左大將此卷ニ
だくも未よ不見其比の大将也。宋花物語云。東宮未
産院の姫宮まつでゆきこひそめ有きれはせうを
むとさうさんへんぐく今へおやうとすよき
。ひへへへへ。也松退^シ數也。涼波のぬせ

。さやううの花退迹也。まれう心也。花宴卷よ
と若菜上巻うわうり。弄やうう羽也。
何うか物語云。門此おれよりやううううう
とやううふ心ふくアクヌ神さうう羽也
。みきうのじぬ取松明石姫君入内延引也

。左大臣の三君弄梅枝左府^レ系圖別也。真木桂^レ左
大臣女^レ向也。別乞是ハ春官^レあつは前^レの冷泉五

。此中^レ細明石中官也
。あをいと河淑景舍相疊也。涼波の女^レ更衣
きひよ源氏代^レ曹司^レ左也

。アヤトモ也。春官也。細中官也

。西月^レ河陽明門院方壽四年三月廿二日入太子

宮年^レ長元十年二月十三日承中官案之後例也

。然而聊爲潤色歟

。アヤトモ也。取松桐疊^レあう調度也

。品アヤトモ也。取松桐疊^レあう調度也

。アヤトモ也。河草子通^レ寝殿北立三階^レ脚置厨
二脚其上東置櫛^レ通^レ一双其下立香疊^レ通^レ西置草
子通^レ其下階置菜通^レ
。アヤトモ也。取松手^レ也

。アヤトモ也。河草子通^レ寝殿北立三階^レ脚置厨
二脚其上東置櫛^レ通^レ一双其下立香疊^レ通^レ西置草
子通^レ其下階置菜通^レ
。アヤトモ也。取松手^レ也

。アヤトモ也。河草子通^レ寝殿北立三階^レ脚置厨
二脚其上東置櫛^レ通^レ一双其下立香疊^レ通^レ西置草
子通^レ其下階置菜通^レ
。アヤトモ也。取松手^レ也

向無上際也

卷之二

よろひのす 乘紫上よゆれりての羽

○うんみみももん花 今テの世ハ假名ハ弘法大師始作之
以前假名、日本紀萬葉ホの書様也。日本記ト假聲、
書墨万葉集ハ以音^{ニテ}字訓^ト義書墨。 河海委有
ゆうき次ヘ細。 昔ハ行草の文字^{スル}テ今^{スル}
やうよへゆき也。 孟古^{ミカベ}ハ舊筆跡也。 もう
もう次^{スル}也。 よくうと也。
或抄一篇^ハつまりてゆくやうよりと
ゆくやうと也。 抄不寛也。

○キノよおうき 巴櫻 妙也
○とようてこそ花 ゆうようへ奥也 背よよううろ
心也とようへ外也 まよようての心也
○めうをとと 美妙と文字清濁古文也

○中宮の孟六条の息石の手跡と云ふておもふと
内氏乃羽也

○アリハ或紙 草文字也 假名の草とも草ハ
カト也 又矣早筆ヨシロクテウツハト也
○ヨシロクテウツハ 万水の息不のヒトモタヌキニスモカモ
トモカモ也
○ヨシロクテウツハ ミゼル殊也 ヨシロクテウツハモヤハ者也
ノイシホの手跡と云氏のアラヒヒヨウトモ
トモカモ也
○ヨシロクテウツハ 細の息不ノヤヒヨウトモカモ也

○うむわうむ細哉方、心うつづハツサよ
うむもと也。巴松源氏やくは名立一也源氏
のとくもとゆきしり源氏ハツモトヤクモト
リハ心也。

○君やよそ益山息子の餘董スリテ秋好を念
比すノ源氏のアリヒシハシガタムラタマヒテモ

我とハズシテシテ也

二、入道の官 細きも雲也

○トモニアリテ花アリニキヨハ必有ヒシモノ物也
メヨリアリト音曲スルノリヨアリモアリニ不
アリハ餘情ハトヨアリヨリシ也初アリテ
トヨアリモトヨアリトヨアリハ足トヨアリヨリ
院の内侍アリ細脉月夜也當世のアリニセ筆
のアリトヨアリ也
○タリシモアリテ巴板我一樣トカクヒトモヘ一ノ有
トヨアリサヘアリ筆迹也
○の君と 細 附月夜也

アラモドウマ花此一段ハ紫上ヨリナシム事也
ヒコの羽ハ紫上との故也

二のよよ 細巒上の弓也
弓也もや、或様もよしとえ心也

卷之三

のあつた。おれもやうやく
あたへとひかへる。人かほけ
きゆく。さうしてまことにま
くわざし。うなづけ
ひりゆく。さうしてまことにま
くわざし。うなづけ
番入さんせ
のまを生むる。よめさん。ぐ
金
トや。おまえさん。えまかく
かづく。おまえさん。おまえさん。
おまえさん。

○うそこすよ 盆 斧敵てぬるをもとすと
いふをうふとて重而念此は民うらわせすと
河覆申へてくとす也

○衣のうえれ 河高麗紙

孟 うとやうのやうううと云ひ也

○宰相中将 孟々雾也

○武乃えの兵車脛 細 告上の兄介也

○あてたる 河 革手歌繪

花 芦手の色葉ハ芦の葉の中又文字とて
水石鳥手のみとて中峯和尚が
の葉丘とひ文字の序ハ篆の葉又似る

○きのもんとくす弄 薫物合ひ一あすきハ

例といア

○あさくさとくす 已故 四月天氣和又清

○おつまみとくす或被古哥りく思案うう个

○女手と 或被きみのうせ一祝女筆せくく

○いふうちやかと 花内まよすふ三三への女房よ
いふうちやかと うめくらむのうめくらむ也
おうあくみ 盆を何と有へととえうと有
物ふせえそと うめくらむやしのく也

○白さあくと 細 皆色絨也
○赤白さ赤ハ筆の勢 うよアシ也

まうえんうり。河掲等ひく牧也万葉校
浦牧之湖とある字也。石葉十二中くは君ニシヒト、
いの浦れあまるアキと玉ミタク

おもとみを細ほ氏、まうりとすのを敷
おもへしもとぞを故といす

。サスヤと 盆金也

おもとみを細ほ氏、まうりとすのを敷
おもへしもとぞを故といす

。けとくへ 細ほ氏の羽 盆徒然きよも

。のゆゑ 細草子也。今ねあわせ

。もくそと 井源氏の筋目と無上も

。のゆゑ 或歎草子の面の様子をつまひて
さめふ也

。もくそと 盆筆のあらわしきも

。のゆゑ 巴批 正風跡よわもと也

。二行ハ花哥一首と三行ハアヌトと
え也又草紙のりくに三行アヌトアヌト
つとも相違アヌト
弄すと云ひあり但草子の羽文字とあら

。のゆゑ やくばあよのやくも

。のゆゑ やくばあよのやくも

○アラモトハ 細 沢氏の手迹也

○筆上もとそつし花班超投筆観書曰大丈夫當立功名異域以取封侯安能事筆観辛未

今案筆をうろと云刊ハ古事心ハ物語

又ハシテ人

○アラモトハ 細官の約叶皆くの中よハおてつまうさうれハ誰分ゆをうひやうと毛河無面下筆をうそと云也

或折面白目う腐うんと也

アラモトハ

細官の約叶

アラモトハの間ア河獲麟一百波字筆俱良
花獲麟一百ハ是とく人の洞と云アル人ノ洞
ト云ハアラム人の感すと洞と云うとゆのもの
おうハよしむる也云々ハ絶妙の筆跡とぞ
て自然よ感涙と催とタヨ約二うてひう也
アラモトハのくやれ河紙屋色紙
アラモトハの北野の紙屋川より紙也

アラモトハの河文字又真草行三体あり
真ハ東帝と人立の財也行ハアリ体也草ハ
走り持也下略或折さうのすとハアリ文末と
正規へきとす也万水集ふるさく也
アラモトハの河又河紙屋川より紙也
アラモトハの河又河紙屋川より紙也

アラモトハの河又河紙屋川より紙也

アラモトハ

。一ときりと 直心とぞこれに一廉とさる也。
○筆のとどきて 細我意よまたをすらせば正まつた
筆にてとひてとくふくのこがくわづら也
○ひきくもと或様文字と筆とぞづうひるや
のひるや

○あかと 弄 異風異解也

○女のハ 或様 朝貢紫上明至止あゆの筆あづる草
子の下也
○さいのんのハきて 或様此卷董物合の時秋院
文のまゝくと筆のくわてほ氏のひじきひむをす
行づるわれが文とゆくうむづる也もやれる故
ちてとし出ぬハわい也

○宰相中将のハ 直 夕霧の芦手とぞやひあと
財難はぬ浦と似るもと

○きふものうよ或様 水よだてねる草木の

○孟 文字とて岩とくと

○れハひとみつゝ 巴缺芦手ハ波入へ三まと

○きくと ゲ 河 真感メフ是本紀

○えんくと 或様 俗艶也えんじうてとえむを
○きふ父手の 万水まくばと物あくしの心と
をといて
○あゆのつゝくと 河 繕紙 卷物也

○井 ゆきうわ 一 手本とも也

○ゆの侍従 細 兵アノの官の内子也

。あでなましもんじうぐ
。よしとくかうおうす。寧ねずね
。ひののひのかひひのひくひのひ
。きけくわわのあひの風が、難
。彼のうかみのひて、とくもとく
。あかくまじめで、あかくまじめ
。あかくまじめで、あかくまじめ
。あかくまじめで、あかくまじめ
。あかくまじめで、あかくまじめ
。あかくまじめで、あかくまじめ
。あかくまじめで、あかくまじめ

花門乃花万首集一部其卷平城天皇詔作

臣撰之見古今序又万葉被五卷二說紀實撰之一說

梨巒五人批也同廿卷不知撰者附外嵯峨山撰四卷

目錄中不見但うへしき撰宣うへりて手本の考

よふくえひせめくらや可尋

弄向云いへの万葉と云矣乞一答倉丘

延喜出門花延喜の時代又撰せらる和哥集

さへ則農筆も有やうより實ハ考へるがゆゑ

うのあき花田河唐浅花田紙綺表紙玉軸

のうのうへ花唐組也弄假て文

おもかく手乃河昔の能書ハ皆善くよびと
くてもさう王羲之筆とも種々の財あり行成ハ
十二の假と申せらる下略

あがくすアマヘ花切符臺よりゆけ

このうれへ花被酒酒氏羽

やうれへ細ほ氏まうせぬ也

女子あると取扱官の羽也

細すひ實子のうじやどと器量無

女子あるば人きくとひよしま誰君を奉

きるが意也

うへくらわへ花被金の婦方こそぞく

さんすを今ハ女子あると申すきく也

侍從よりのや細ほ氏の返報也

上中下弄うへりと
孟うへりとよしをね也

うへるや被扱 假名の善惡のゆはせぬ也

うへるや被扱 假名の善惡のゆはせぬ也

うへるや被扱 假名の善惡のゆはせぬ也

つうす。さうのゆれ方。こなが筆道集
さへじ。じへせねてからで。筆道集。筆道の
アト。れす。筆道集。とう。乃
あまむる。じめく。をはす。も。あ。は。
タのう。う。わんの。う。の。まの。ア。し。
おが。じ。おの。ち。じ。の。う。も。の。う。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。
ア。ひ。の。あ。と。か。ぬ。り。く。ア。も。

○は、よハ弄 明で中宮の所うちれ箱也
或掛品くうする人の手次ハ入るもと也

○人の内うちも 盟 日本の外すもあらむと
万水 唐とどまきやうの室としを

○うとうとおは 挂種こうの物の中と別而
此草子あとゆづくらむ也

○うとうとおは 日記 弄 繪合は須磨明石の二巻
くうとうとおは出でての余とへ残へるをす
孟 明石姫君の今ちと成へりてと

○うちのよと、ハとのたひと、のくの
或掛雲井雁を内へらひぬいふみるばね也
明石姫君の入内れといへしととてみて別而う
めくらむ也

○ひちきとの細 雲井雁也

○あつゝ 河情アタミ

○アマーチウムシキ 万水内府の内代種と

○みへり 細夕霧セモアソビのぬきもる也

○かうやうよ 孟 夕霧トウツモヒヨウ音信
ドクジ也

○アマーチウムシキ 或掛此方トウツモヒヨウヒト外
國ヨウシ也

○人ちと細人ちと後悔う也

○うつと細人ちと後悔う也

○しおりぬくね也

○うちのよと、ハ 盟 致仕也

或掛雲井雁を内へらひぬいふみるばね也
明石姫君の入内れといへしととてみて別而う
めくらむ也

○ひちきとの細 雲井雁也

○あつゝ 河情アタミ

○アマーチウムシキ 万水内府の内代種と

○みへり 細夕霧セモアソビのぬきもる也

○かうやうよ 孟 夕霧トウツモヒヨウ音信
ドクジ也

○アマーチウムシキ 或掛此方トウツモヒヨウヒト外
國ヨウシ也

○人ちと細人ちと後悔う也

○うつと細人ちと後悔う也

○しおりぬくね也

細内へ臣の出でうるをとふと

きくまひぬ也

。おもてつり 奥抄已下タ露のゆ也

。おもてふ 益致仕と恨ひとも雲うけの外よ

別人とハじくとタ露の心也

。おもてくと河めうわやと心えそもあひ
アねハとくとさうさうそそそそそ

。あさアさア向六位宿世といひよ也

。おもてハ細便皮也タ露のひく住とまひぬ也

。おもて 細雲舟雁のゆ也
或抄 ほ氏の約也

。右のやく 中勢官 細皆系圖不見

。物とまこと或抄 夏露也

。おもてハ花そうハ源氏君のタ露と教訓
教也アニキ也教也ハ源氏君じうノ桐壇のゆ
ゆをへとどひ出一也

。おもて 或抄 詞とまこと也

。今おもて花そう孟桐壇のゆりんと其
時ハとじさうと今おもて花そうと有りて
ゆをへとどひ出一也

。おもてくと花夕露の徒然うつてあきひ心
よみせの或抄 宿縁といふものあつてまつまき

。平人ひとよみうまつまきあつまき也

。おもてくと花夕露の徒然うつてあきひ心
よみせの或抄 宿縁といふものあつてまつまき

。平人ひとよみうまつまきあつまき也

もしよ河を牛八千頭と云ふ也。又案て
のちトモトヨリ心俗ニアリトムと云セ
孟河海をアリウカアビヨトキトモトテ入道
右存ハトモトヨリ

つひもとくわう 花は民の戒みとのみ也

○うそとまことくへゝ。万水は民のいりへ隨分とく
ちえんとうえ好色のうそとあひめてたほす
とまやひひへゝを

○位あゞて 弄位の浅き川ハ進退自由もあらず
すうあづくら也 孟位淺じて才とくろくしくゆる
きと勤善懲惡除民の教訓也トノリ

。其の事にて河寛平遺誠云左大臣時平先年於事
有取失世継よ天暦帝安子中宮とせひて内歎を
浅きゆゑよ式内宮の先方のひとかばせともうせ
ひてうりりりりよゆるめて世へ改じちやあらん
と大野宮のやううきをかへとく取要書之河委
細此段殊勝の段也

孟菩提也

河赤つひ花のもの也
花生、一度アラモトさんと、心よき、アラモト
アヒトと、アラモトの情あらへ心也
巴枝、アラモトアヒト、アラモト、取合てきよ合
とも堪忍車一と也 さしひて句

トシテ、タガキニセテ、又女心やかましく成るを
トシテ、人を引くて堪忍せり。

おんとく細一トシテ也
孟子一身をあわしのす也
或妙され一ととてうるよびて也

名うも細夕霧の心也と云ふ雲井雁乃
うとひとておこる也

人やつもと巴被けしやと見え
とて堪忍ハヤアリテハ云ことえ也
安と常ち花是ハ雲井雁の名次也
タナヒキ也

河内ねこすうとくとつ
あそちにえうとくとく

呂文ハ孟夕霧ト云井雁也

おうきとく河内ねこすうとくとつ
ようちもとどり我ハみのん
巴被夕霧の心ハ傷きとくと云ふと
云井雁の心底也
世うれすくも、弄夕霧の友と云井雁乃
り、もとみの云也
中勢官と云井霧ト云井雁
トシヒトシヒトのす也

おくハひさト何致仕大臣さとす、夕霧と
シテ今又ちひひゆみ引入へと云也
おひてうると弄内のす、雲井霧

少くもあつて、中勢官と云
おもすのほきとおひくとく
やとおがうとくとくとく
えとれとおとくとくとくとく
ぐとくとくとくとくとくとく

うきよの花の万葉々霧のものひす
かくの口ひき花ほ氏の口ひれあひとこ整
のやくめときひきあひたす也

とうきそとくを細内大臣姫君へよか也

ゆきせき 細内大臣の心せよとぞとぞとぞ
まくとも

立あひわす花致仕大臣に立て我ゆ方へ帰り
ひくはくみよおもとくらむ也

あやしむやくして已抄雲井庭我心のやまと
ひ名也心のとうるをと云心也
ひよがり或妙父をとのがりかきる
かうじよと

ゆえあす 細夕霧うけ父也

ひこうか万水うんぬいうよようかほも

うきよさひう 細雲井雁のつゝひとひよ常
あらぬ也くつさること意と云とれすまち
ニシテモう心めうさひ我身れどもう類えとあま
うじよと
大臣がのめう猪一と夕霧の文よあひせび
ぬとうとせ此うわう

うきよとしう 雲も鹿也 花夕霧のあひす
きふくや人よとうとあひよとてうきよとて
くまのうのうかうれとをううわれはとれで
ふくわせよあひうふうひうれは娘と

うきよとしう 雲も鹿也 花夕霧のあひす
きふくや人よとうとあひよとてうきよとて
くまのうのうかうれとをううわれはとれで
ふくわせよあひうふうひうれは娘と

うきよとしう 雲も鹿也 花夕霧のあひす
きふくや人よとうとあひよとてうきよとて
くまのうのうかうれとをううわれはとれで
ふくわせよあひうふうひうれは娘と

も。おとす雁の返事。よき處はまく。さへりあらとあやしくもしなれ
きのあつるといひのあり。うち利也。霧の
君は益々うきあつてゆき。すりぬれ。何ぞうすと。どどづきつてあらむ。
やうえ返事。しのぎすとあやしくりてうらと
うそじ。ねだらぬ。とひきうせ
。アラのねぐらも。細巻の終。利也。皆如説

